

「私は、死ななければならぬのでしたら、死にます」

「プリンセス・オブ・ペルシャ」

評者・前島 常郎



2006年 アメリカ映画 120分
監督 マイケル・サイベル
出演 ティファニー・デュボン、ルーク・ゴス他
DVD販売元 ビデオメーカー



●ストーリー

旧約聖書の中でも異色な物語、エステル記の映画化である。舞台は、紀元前5世紀のペルシャ。登場するのは、エステル（ティファニー・デュボン）、エステルの育ての親モルデカイ（ジョン・リス・デイビス）、アハシエロス王、そして悪役として欠かせないのが重臣のハマンだ。

●まず聖書を

ストーリーは、聖書を基本にしているが、ドラマチックな効果を得らうと、あえて解釈を加えたり変更しているところも多々ある。娯楽映画として楽しめるが、せっかく聖書に題材を取った作品なので、子どもたちに事前にエステル記を読ませてから鑑賞し、見たあとで意見を交換することもできる。たとえば、

・エステル記よりも500年も前のサウル王と預言者サムエルの時代の物語が冒頭に語られるのはなぜ？

・エステルが王さまに年代記を読み聞かせた時に、エステル自身の記憶から話したのは聖書のどの物語？

・王への謀反を企んだ宦官たちの物語（エステル記2章21・23節）がどのように脚色されている？

・エステルへの篤い信仰を表すどんなセリフがあった？

・エステルが王にユダヤ人のいのちを請いをするに至る場面は、聖書とどのようにちがって、どの点が同じ？

●推薦ポイント

古代ペルシャの風俗を描き出すのは至難であったろうが、重厚な宮廷生活が丁寧に描かれ、現実味がある。見ているだけで、紀元前5世紀のペルシャに連れて行かれる。

残虐で有名なペルシャの軍隊が

登場するが、中には平和の尊さを主張する将軍もいる。

異郷の地で暮らす神の民が、目に見えない神をどのように証したのか。迫害者の手をどのように逃れたのか。人間的な榮譽や地位をクリスチャンはどのようにとらえるべきか。今のこの時代の日本に私たちが神の民としておかれた意味は何なのか。

娯楽映画として楽しみながらも、考えを刺激されるきっかけにもなる。

●最後にひと言

ハマンの処刑などの残虐シーンは、画面に映されないのが安心して鑑賞できる。

新王妃を選定するのに、おとめたちがひとりずつアハシエロス王のところに入っていくシーンがあるが、せいぜいが気に入ったエステルに王がキスをする程度で、子どもに見せられない場面はない。ただし、性に関して子どもがなにげなく発する可能性のある質問への答え方は、心の準備をしておく必要があるかもしれない。苦難の中で働く神の摂理とエステルの捨て身の信仰を際立たせる佳作である。